

ミニ・マレーシア・アンド・ジャパンフェスティバルにおける
宮川大使スピーチ

平成26年3月15日

去る3月6日、家族と共に、20年前に在勤した当地に着任しました。「戻ってみれば、こは如何に、もと居た家も村もなく」。その一抹の寂しさはありますが、経過した年月の中で、この国の政府と国民が努力して遂げてきた近代化、経済成長は祝福に値します。

この国に戻ってきて、古い友人と旧交を温め、またお互いの国と国民の中に、より展開しつつ成長して来ているもの、そして変わりなく大切にしているもの、などを確認したいと思っています。

20年間の経済発展の中で、街の姿は近代的になりましたが、変わらないもの、それはマレーシアの人々でしょうか。温順、素朴、親切で、そのうえ親日的。家族や地域の人々との交わりを大切にし、伝統を重んじ、礼儀正しく、思いやりが深く、人情に厚い。20年前の印象は、その変革の後も、嬉しいことに、変わっていないように感じます。

20年前の私の日記には次のような下りがあります。金銭的に高価な、いわゆる食通の胃袋を満足させる料理はなくても、豊富な果物、心のこもったもてなし方、食物を大切にしようという食事のマナーの中に、爽やかさと清々しさを感じました。

武士道には、弱きを助け、強きを挫くという教えがあります。我々日本人は、とりわけ大戦後の日本人は、こうした精神を忘れ、強いものにすりより、弱いものを苛めたりしていないかと、常に注意しなければなりません。新渡戸稲造という、国際連盟の事務次長をした日本人が、今から100年前に「武士道」という本を英語で出版し、世界中で日本についての理解が進みました。

その中で新渡戸は、日本人の間で長い年月かけて育まれてきた武士道精神は、花の種が風に乗って他の地に芽を出す如く、たとえ日本に消えることがあったとしても、他の地で立派に育つことであろうと、書いています。

武士道精神が日本から消えないようにしないといけないと私は思いますが、今

般、マレーシア剣道連盟に、全日本剣道連盟から、竹刀や剣道着などを寄贈させて頂きますが、これがマレーシアの剣道の発展に寄与し、マレーシアにも武士道の花が開花することを願っています。